

学びと交流を進めた国際会議を力に 改めて「介護の社会化」を強く求める

2017年6月10日 総会アピール

認知症の人と家族の会 総会参加者一同

「家族の会」は、4月26～29日、2004年に次いで2度目のAD I国際会議を京都で開催しました。本日、私たちは結成38年目を迎える総会で、国際会議成功のために本部、支部を挙げて努力したこと、当日は発表や展示から参加者の接待に至るまで尽力したこと、何よりも800人近い会員が全国から積極的に参加して会議を盛り上げたことなどを確認しあい、成功の喜びを分かち合いました。

前回の国際会議は認知症への理解を大きく転換させ、「認知症の人が主人公」の流れの端緒を開きましたが、今回の会議では、主役となって発言し主張する本人が連日登場し、その流れがさらに大きくなったことを示しました。また、認知症に関する研究や教育啓発などの取り組みが、世界各地で活発に展開されていることも学びました。国内的には、国際会議を契機に「認知症関係当事者5団体」の共同の取り組みが始まったことも、多くの本人と家族、支援者の中に明るい希望を生み、さらに連携を強めていこうと話し合いを進めています。

しかし、このような成果が見られる一方で、困難な介護に苦闘している人たちが大勢おられることが現実であり、その介護への支援を巡る状況はますます厳しさを増しています。新オレンジプランが提唱され、認知症の早期発見、早期対応が重要と言われているにもかかわらず、介護保険制度では、要支援の人が介護給付から外され、利用者2割負担に加え3割負担までもが導入されました。さらに、訪問介護の家事援助を自己負担とする案などが見え隠れしています。こうした一連の「負担増・給付削減」の動きは、「介護の社会化」に逆行するものであり、私たちは到底認めることはできません。

私たちは、「認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない」とうたう「家族の会の理念」を掲げて、「介護の社会化」を強く求めて、これからもいっそう努力することを、本日の総会で改めて決意するものです。

以上